



# 「詩人大使」の足跡をたどって

——ポール・クローデル研究の発展から、フランス詩受容や日仏交流も考究——

古本屋好きの少年の人生を変えた

ジャン・コクトーの詩

——研究者をめざすまでの道のりを教えてください

もともと小説を読むのが好きで、小学校高学年頃は日本の近代文学を読みあさっていました。古い漫画も大好きで古本屋に通い詰めるうち、気付けば外国文学も読むように。そんな中学生時代、小学校の教科書で目にした、20世紀のフランスの詩人ジャン・コクトー作、堀口大文學訳の「シャボン玉」という詩と再び出会うこととなります。「シャボン玉の中心へは庭は這入れません まはりをくるく

る廻つてあます」。日本文学にはない独特の言語感覚に対する強い興味が再燃し、堀口大文學が訳した詩や小説を片っ端から読み、中でも19世紀フランスの詩人アルチュール・ランボーに熱中しました。フランス文学者でもあった福永武彦の小説や福永が訳したシャルル・ボードレールの詩なども愛読していました。やがて詩集だけでは飽き足らず研究書にも手を伸ばすようになると、大学教員として文学研究を職業にしている人がいることを知りました。自分は会社勤めには向いていないと何となく感じていたので、「将来はフランス文学研究者として身を立てよう」と中学3年生の時点で決意し、今

に至ります。

クローデル研究を出発点に  
広がる新たな研究テーマ

——先生の研究テーマである、ポール・クローデルにたどり着いた経緯を教えてください

大学では当然ながらフランス文学を専攻。Wスクールで語学学校にも通い、徹底的にフランス語を学びました。学部時代の卒論のテーマは、ゼミの指導教員が専門にしていた19世紀フランス象徴派の詩人ステファヌ・マラルメ。大学3年生のときには初めてフランスに渡り、現地で参考文献を集めるなどして卒論を書き

上げました。

大学院では、マラルメの弟子にあたるポール・クローデルの研究にいそしむこととなります。クローデルは20世紀フランスを代表する詩人・劇作家でありながら、本業は外交官です。1921年から1927年にかけてフランス大使として日本に駐在し、本国外務省に送った膨大な量の外交文書の中で、日本の政治・経済・文化について興味深い考察を展開しています。能や俳句、日本画といった日本文化からインスピレーションを得た文学作品も創作しており、「詩人大使」と呼ばれました。修士論文ではそんなクローデルと仏領インドシナの関係を取り

がくたに りょう  
学谷 亮

文学部准教授

慶應義塾大学文学部人文社会科学科仏文学専攻卒業。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程満期退学。博士課程在学中にソルボンヌ大学(旧パリ第4大学)フランス文学・比較文学研究科修士課程・博士課程に留学し、博士(フランス文学・文明)の学位を取得。中京大学教養教育研究院講師・准教授を経て2024年より現職。専門は近現代フランス文学、日仏交流史、比較文学。

上げました。

その後、日本の大学院に籍を置きながらフランスのソルボンヌ大学に留学し、クローデルの「日本観」をテーマに博士論文を執筆しました。以降もクローデルの研究は続けており、現在は大正期の日本人がどのようにクローデルを受容したのか調べています。これまで積み上げてきたクローデル研究の成果を、単著としてまとめるのが目下の目標です。

### 日仏交流や大正期におけるフランス詩受容なども研究しているところがいい

クローデル研究をさらに発展させ、大正期の「日仏交流」の領域横断的な研究を試みています。我が国の日仏交流の研究においては、対象時期が幕末から明治初期に偏っており、外交や国際関係の分野が手薄であったり、日仏関係が構築されるうえで重要な役割をもっていた地域が視野に入っていないといった問題点があります。これらを克服すべく、日仏両国のアーカイブで外交書簡を地道に収集し、中国やインドシナとのかかわりを視野に入れたうえで、大正期における国家レベルでの日仏関係を整理していくつもりです。

一方で、大正期の詩誌のクローデル特集号を手に入れたことから、大正期にフランス詩がどのように受容されていたのかという比較文学的研究にも着手しています。フランス近代詩の本格的な移入が始まったのは、1905年刊行の上田敏

による訳詩集『海潮音』。その後の永井荷風訳『珊瑚集』（1913年）や堀口大蔵訳『月下の一群』（1925年）のような訳詩集だけでなく、当時続々と創刊された文芸誌や詩誌にもフランス詩の翻訳や紹介記事が掲載されています。そうした翻訳や記事を網羅的に調査してデータベース化し、媒体ごとの受容傾向を解明することをめざしています。

また、長きにわたりフランスの極東政策の中心であった中国、特に上海フランス租界に注目することで、日仏中3か国の交流を多角的に捉える共同研究チームでも活動しています。特に上海フランス租界と日本との関係は興味深く、同地に暮らしていた日本人の調査などを通して、租界の文教活動の中心人物だったシャルル・グロボワと日本のかかわりを掘り下げたいと思っています。この研究は日仏交流研究の足掛かりにもなるもので、最終的には、大正期の日仏交流の実態を国家と民間の両視点から把握できるような著作を書きたいと考えているところです。

### 自分で考えることを大切に 実際の知見で可能性を開く

学生を指導するうえで大切にされていること、学生に望むことを教えてください

学生を子ども扱いすることなく、彼らの自主性を尊重することを心掛けています。必要以上に口出ししない代わりに、自身が選択したことへの責任は自分自身に

あるということを徹底して指導しています。また、インスタント食品のごとき手軽でわかりやすい「知」が好まれる中、ゼミでは一筋縄ではいかないような複雑で難解なテキストをあえて取り上げることで、教師が学生と一緒に学ぼうとする姿勢を見せるようにしています。

実は、自分自身が学生だったころに比べると、最近の大学生の気質は変化しているように感じています。自分の責任のもとで発言することを恐れ、誰かの意見に乗っかることで安心しているように見えるのです。しかし、自分の頭で考えることは何よりも大切なことです。複数の意見を比較検討して吟味し、自分の考えをはっきりさせることが、研究においても仕事においても重要となってきます。だからこそ、恐れずに他人の意見を批判する姿勢も育んでほしいと考えています。

### 最後に、学生へのメッセージをお願いします

フランスの文化は、さまざまな要素の混合によって形成されています。ラテンやゲルマン、ケルトといった文化が混ざり合っており、間口が広いのが特徴です。だからこそ、フランス文化を軸に多様な研究が可能となるので、ぜひ興味をもってもらえたらと思います。私自身、フランス文学やクローデル、日仏交流史などを研究する中で、さまざまな方向から物事を見ることの大切さを思い知りました。比較の中でこそ見えてくる新たな知見というものがあります。自分の専門分野に

とらわれず、広い視野をもつことの大切さも、フランスの文化が教えてくれることでしよう。

学びの本質は、さまざまな事象の間にリンクを張り巡らせることにあります。狭い範囲を見ていたのでは充実したリンクは作れません。異なる分野の知見が、自身の専門分野に新しい可能性を開いてくれます。「わからない」ことを避けるのではなく、自分の理解の範囲を超えるような対象に果敢に挑み、「そこに何かあるな」と感じたら臆することなく食らいついていく。そんな気概も、ぜひ大切にしてもらえたらと思っています。

### 【論文・著書紹介】

#### 『上海フランス租界への招待』

(榎本泰子・森本頼子・藤野志織編、勉誠出版)

上海フランス租界をフランス・中国・日本の3か国を結ぶ場と捉え、具体的な人物・事象を掘り下げることで、人々の暮らしから文化・芸術、政策・外交までを多角的に考察する。第Ⅲ部の「文明か国家か——駐日フランス大使ポール・クローデルの中国観」を執筆。

#### 『クローデルとその時代』

(大出敦編、水声社)

作家ポール・クローデルが外交官として東洋に赴いた時代とはいかなるものだったのか。[I 日本] [II 演劇] [III 音楽] [IV 宗教] の諸相からアプローチし、詩人大使の多面性に光を当てる。[I 日本] の「クローデル、メルラン、幣原——1924年の極東」を執筆。

